

五つ子のお母さん

元NHKアナウンサー 山川 静夫

昭和四十九年春、NHK宮田輝アナウンサーが司会した『ふるさとの歌まつり』が、宮田さ

その最後の旅は「鹿児島」だった。やれやれやと役目を果たせるのかという安堵の気持ちと、やや感傷的な気分が入り交じったのを覚えている。

んの政界入りで終了し、次の地方派遣番組として登場したのが『お国自慢にしひがし』で、なんと、その司会者に私が指命された。

私が鹿児島入りする二ヶ月前、NHK記者の山下頼充・紀子御夫婦に五つ子が誕生し、このビッグニュースは、すでに全国的な話題になっていた。紀子夫人の実家は鹿児島で、出産も御

この通達を受けたときは「まっぴら御免」という心境だった。毎週火曜日から金曜日まで、全国各地を訪問し取材して公開番組を制作し司会する仕事は、誰でも尻込みするはずで、しかも超人気者の宮田さんの番組のあとという重圧も加算される。

ていた。紀子夫人の当地だから、『お国自慢にしひがし』でもふれる必要があると考えた私は、取り敢えず紀子夫人に会うことにした。

しかし命令とあれば仕方ない。最初はつらかったが、担当しているうちに「つらさ」よりも「感謝」の気持ち次第に強まってきた。一年中、日本各地の現状を自分の眼で確認できるこ

同じNHKの仲間という気安さはあるものの、紀子さんが報道各社の熱狂的な取材に疲れ、悲鳴をあげているのではないか、控えるべきか、とも考えたが、得難いチャンスを逃すのは残念との思いが優り、私は恐る恐る電話のダイヤルを回した。

の番組、こんな果報は他の誰にも味わえないと気付き、有難さがこみあげてきたのだった。

「わかりました。それならば、明日十一時四

『お国自慢にしひがし』は、二年間担当した

十五分に三回目の授乳で病院に参りますから、その時にお会いしましょう」

あと、昭和五十一年三月に司会は交代したが、

紀子さんは、静かに電話の向こうで私の願い

を聞き届けてくれた。

翌日の三月十日は小雨模様だった。病院の応接室でほかにし外西産婦人科部長と雑談していると、ドアが開いて紀子さんが現れた。この人が五つ子のお母さんか、と驚くほど華奢な方だが、見るからに聡明で明るく美しい人だった。

「私って、今日はどうかしちゃってるんです。こうしてオッパイを届けに病院に来たのに、それを家に忘れてきたの。駄目ねえホントに！」

紀子さんは、いたずらっぽく自分を叱ると、黒眼がちの大きな瞳をクルクルさせる。まろやかなベールで温かく周囲を包みこむような人柄は、五つ子のお母さんにふさわしい。

「いつも取材する記者のご主人が、取材される側になって、さぞ面食らったでしょうね」こう伺うと、

「でも主人は、取材される方が他紙に抜かれる心配がなくていいや、なんて言っています」

と紀子さんは笑う。私もすっかり楽になっていた。

しばらくしてから、新生児室のガラス越しで五つ子ちゃんたちに会わせてもらった。妙子ち

ゃんは一番心配されたが手足をバタバタさせて元氣。寿子ちゃんほうつ伏せになって空腹を訴えている。長男が福太郎、そして、寿子、洋平、妙子、智子。五人の名前は京都清水寺の管長が命名したという。

あとから考えてみると、昭和五十一年は「ロッキード事件」で田中角栄前総理大臣が逮捕されるなど、何となく暗く重苦しい一年だったが、一月三十一日にめでたい五つ子誕生のニュースは唯一の明るい話題で、全国民の笑顔に応援され、五つ子はすくすくと育っている。

母親の紀子さんは驚くほど冷静だった。何も言わず静かに子供たちの前に立っているだけに、その姿には、得も言われぬ慈悲の心があふれんばかりだ。五人の子供が一度に生まれた驚きだけではない。紀子さんを取り巻く人々の心も自然に癒してくれる不思議な力を、強く感じた。

私が司会した『お国自慢にしひがし』の旅の終わりに、山下紀子さんと五つ子ちゃんに出会えた幸せを、いつまでも忘れないだろう。そし

て、あれからもう半世紀近く過ぎて、五つ子ち
やんたちはどうしているだろうと思っ「ことある
る。しかし、この情報過多の世の中、それを静
かに見守るのもマスコミの良識なのかもしれな
い。